０２・３日前

本編トラック０１の、三日前。

とある年の春。十六時ごろ。
場所は大陸西部。
天気は晴れ。気温は二十度程度。

場所は、奴隷商人イザベラの屋敷にある一室。
主人公は今、その部屋に通された亜人の少女『メルヤ』のところへ向かっている。

ＳＥ１　外の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【建物の中から、外の環境音が聞こえる】
【０―５秒ほど流してＳＥ２】
【その後、音量が小さくなる】

【トラック終了まで流し続ける】

SE2　主人公の足音
【最初から最後まで流す】
【かなり小さめの音量で流す】

SE3　主人公が、そっと扉を開けて、閉じる音
【最初から最後まで流す】
【小さめの音量で流す】

SE4　主人公の足音
【最初から最後まで流す】
【かなり小さめの音量で流す】
【SE2と同じ音】

主人公、歩きながら、これまでの出来事を反芻している。
その中で一番に浮かぶのは、これから会いに行くメルヤの事だ。

主人公が潜入調査を始めて、約一か月。
その間、最も親しくなり、信頼を寄せるようになった相手が、メルヤだったからだ。

この一か月、主人公はメイドとして働きながら、屋敷内の情報を着々と集めた。
並行して、イザベラの隙をついては亜人の少女達を手助けし。その過程で、メルヤを始めとする、数人の亜人の少女と仲良くなっていったのだ。
この屋敷において、彼女達は地下牢という劣悪な環境に押し込まれ、イザベラや他の使用人に、ひどい扱いを受けていた。
それでも生きる希望を失わず、彼女達は脱出の意思を持ち続けていた。
主人公はそれを、メルヤの力によるところが大きいと思っている。
メルヤは主人公よりも年下だ。
だが、とても落ち着いており聡明で、しっかりとした教育を受けた女性だった。
また、単純に器量がよいだけでなく、複数の亜人の特徴を身に宿すという珍しい容姿をした、独特の雰囲気ある美少女でもあった。
そのメルヤと、彼女の妹分の『チハ』がリーダー格となる事で、亜人の少女達は一枚岩となり、二人の人柄があったからこそ、亜人の少女達は前向きでいられた。
少なくとも、主人公はそう捉えている。

――だが、彼女達の強い結びつきは、今夜引き裂かれる。
『希少な亜人である』という理由で、メルヤだけが先に売られる事になったからだ。

〈主人公〉
「……」

主人公、メルヤの部屋の中に入り、話しかけようとするものの、声が出ない。
ここまで来ておきながら、今の彼女にどんな言葉をかけたらいいか、わからなくなってしまったのだ。
そんな主人公を見かねたように、メルヤが先に話し始める。
彼女は窓の外を見たままだが……それでも会いに来たのが主人公であると、理解しているようだ。

▲　ボイス加工あり
【1メートルくらい離れているイメージ】
●正面　30センチ
「【穏やかに落ち着いて。にこやかに。
視線を別の場所へ向けたまま、主人公に話しかける】

あら……貴方様でしたか」

メルヤ、ゆっくりと振り向くと、穏やかに微笑みかける。
だから主人公は、それだけでぎゅっと胸が締め付けられる思いがする。
メルヤは今、とても笑顔でいられるような状況にない。
それなのになお、普段通り落ち着いて、気丈に振る舞っているからだ。

▲　ボイス加工あり
【1メートルくらい離れているイメージ】
●正面　30センチ
「【穏やかに微笑みつつ、嬉しさがにじみ出ている感じで。
メルヤはすでに、主人公に淡い恋愛感情を抱いているので。
それから、主人公が今にも泣き出しそうな顔をしているので。
そして、主人公の正体にうすうす気づいているので。
メルヤはさすがに『主人公は、別の街から潜入調査にやってきた騎士』というところまではつかんでいない。
だが、『少なくとも、ただのメイドなどではない』とは思っている】
ふふ。

いつも、何処からともなくいらっしゃる。
不思議なメイド様ですね」

〈主人公〉
「あの……メルヤさん……」

だから主人公は、今にも泣いてしまいそうだ。
メルヤはこれから、おぞましい目に遭う。
そうとわかっていながら、主人公は手が出せず、それでもメルヤは主人公にこれまで通り接してくれるからだ。

▲　ボイス加工あり
【1メートルくらい離れているイメージ】
●正面　30センチ
「【穏やかに落ち着いて。
これから主人公が何を話そうとしているのか、すでに察しがついているので。
この事について、メルヤはすでにおおむね理解しているので】
ええ……存じ上げております。

今夜この屋敷で行われるパーティは、ただの晩餐会などではない。
私（わたくし）達の中から、選りすぐった者を競売にかけるための物だと。
【穏やかに落ち着いて。
これまでと変わらないトーンで話す。
主人公を心配させたくないので】
そして、最初に売られるのは私（わたくし）」

〈主人公〉
「……っ」

▲　ボイス加工あり
【1メートルくらい離れているイメージ】
●正面　30センチ
「【一呼吸おいてから。
穏やかに、確認するように言う。
ひとつ前のセリフ『最初に売られるのは私』に続く形で話す。
『最初に売られるのは私……ですね？』という形になる】
……ですね？

【穏やかに根拠を述べる。
同時に『この認識で間違いないだろうか』と、主人公に尋ねている。
とても低い確率ではあるが、見当外れという事もあるので。
念のため確認しておこうと思っている】
その準備として……私（わたくし）は急に、このような立派な部屋に入れられた。
そうでしょう？」

〈主人公〉
「……」

主人公『そうです』とも『違います』とも言えずに、黙ってうつむく。
これではただの時間の無駄だ。
それをわかっているのに、言葉が出ないのだ。
なぜなら、主人公はこれから、売られるメルヤを見捨てる。
『イザベラを告発するための証拠はつかんだものの、騎士団がまだ到着していない』
そのような理由で、一人の友人を見捨てるからだ。

▲　ボイス加工あり

【1メートルくらい離れているイメージ】
●正面　30センチ
「【穏やかに優しく。
自分にすっかり同情し、泣きそうになっている主人公がいとおしいので。
本当は自分も泣きたいし、逃げ出したい。
だが、そうするわけにはいかないので】
あら。
なぜ、貴方様がそのような顔をなさるのです」

だが、そんな主人公の苦悩すら、メルヤは見透かしているようだ。
メルヤはすでに、主人公の正体におおむね気づいている。
つまり『主人公であれば、自分を助けられるのではないか』という事を理解しているらしい。
しかし、現実にはそうできない事まで見抜いていて……だから、このような優しい顔をするのだ。

▲　ボイス加工あり
【1メートルくらい離れているイメージ】

●正面　３０センチ
「【穏やかに、落ち着いて。
『自分が他の少女達よりも先に、奴隷として売られていく事』また『それについて納得している事』について、自分なりの根拠を話す。
主人公の心を見透かすように、また、主人公に優しく言い聞かせるように。
しかし実際は、自分自身にこの言葉を言い聞かせて、己を納得させている節がある】
ここに連れて来られた時から、覚悟は決めております。
仮に私（わたくし）が逃げた所で、他の子が犠牲になるだけ。
であれば、年長の私（わたくし）が、この役目を担う。
あの子達の姉貴分として、出来る事はこれ位しかございませんわ」

〈主人公〉
「……そんな……」

▲　ボイス加工あり
【１メートルくらい離れているイメージ】
●正面　３０センチ
「【穏やかに、落ち着いて。

今日、これから屋敷にやってくる、奴隷を欲しがっている好事家達について話す。
まるで『自分が人目を惹く珍しい容姿をしている事は、むしろラッキーだ』とでも言うように】
それに、本日のお客様方は、私（わたくし）に大層ご関心がおありなのだとか。
【穏やかに、落ち着いて。
自分の容姿の特徴について述べる】
羊だけでなく、蛇や蝙蝠（こうもり）。
『複数の特徴を持つ亜人は珍しい』と、鼻息を荒くしていると言うではありませんか」

メルヤ、そこまで話すと、ふいに主人公に近づく。

SE5　メルヤが主人公に近づく音
【最初から最後まで流す】

メルヤ、主人公の左耳に顔を寄せてささやく。
これによって、声の聞こえる方向が『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく

「【優しく、ひそひそと。
『パーティ中に行われる競売中、どうにかして自分が時間を稼ぐ。その間に主人公は屋敷を探り、脱出の糸口を探してくれないだろうか。そして、他の少女達と一緒に逃げてはくれないか』という意味で言っている】
ですから、少しは貴方様のお役に立てるはずです。
時間は私（わたくし）が稼ぎます。
貴方様はどうか、あの子達を救う手立てを探して下さいまし」※

〈主人公〉
「メルヤさん……！」

主人公、メルヤの覚悟を聞いて涙がこぼれる。
『時間は私が稼ぐ』メルヤは簡単そうに言っている。
だがその時間は、実際にはどのような事をして捻出するというのだろう。
考えるまでもない。メルヤは自分が美しい女性である事や、珍しい亜人である事を最大限に利用して、おそらく手段を問わずに時間を作るつもりなのだ。
それは、想像するのも恐ろしい事だ。
本来、絶対に許されず、絶対に起きてはいけない事だ。

なのに、主人公は――……。

●正面　15センチ

「【穏やかに優しく笑う。
思わず笑ってしまう。
主人公が、あまりにも泣きそうな顔をしているので。
主人公が、正体がうすうすバレている事も気にせず、メルヤの心配ばかりをしているので】

ふふ。
とうに存じ上げておりましたわ。
貴方様が、ただのメイドなどではない事は。
例え私（わたくし）がここを去っても。
貴方様であれば、きっとあの子達をお救いして下さると信じております。
【穏やかに、でも少し悲し気に。
あえて自分からこの件について触れる事で、心のダメージを軽減しようとしている】
私（わたくし）がお会いできるのは……きっとこれが最後でしょうけれど」

〈主人公〉

「……っ」

メルヤ、絶句する主人公に、深々と頭を下げる。
そして顔を上げると、優しく微笑み……まるでこれが今生の別れであるかのように、こう言った。

●正面　15センチ
「【穏やかに落ち着いて。
普段通りの口調で、まるで告白しているようには聞こえないようなトーンで】
お慕いしております。
貴方様がこうして、隠れてお出ましになられては、私（わたくし）達を励まし。
沢山の物を与えて下さった事。
私（わたくし）には、何よりの幸せでございました」

主人公、メルヤの言葉を聞きながら、この屋敷に来てしまった頃、この任務を受けた事を、心から悔いる。
自分はここへ来てはいけなかった。自分ではなくてもっと器用で冷静な、たとえばミーシャのような人間が来るべきだった。

そう思って、息もできずにいる。

主人公はここへ来る時『この任務を機に、自分を変えたい』などと思った。
屋敷で苦しむ亜人達の事を真剣に思っているふりをしながら、本当は心のどこかで、任務成功と自己実現を結び付けていた。
だが、そんな気持ちは、かけらも持っていけなかった。
ガラテアに『やってみないか』と言われたから。
いつも厳しい長姉に認められたような気がして嬉しかったから。
この任務をクリアすれば、きっと、騎士として飛躍できると思ったから。
これは、そんな考えで引き受けるべき任務ではなかった。
難色を示すルミナやミーシャの言葉によく耳を傾けて、おとなしく『自分には向いていません』『おそらく遂行できないでしょう』と認めるべきだったのだ。
だから、主人公は思う。

それができなかったわたしは、今すぐ騎士をやめるべきだ。
可及的速やかに、騎士ではない生き方をするべきだ。
そうする事で、初めてわたしはメルヤさんに、亜人のみんなに顔向けできると思う。
それしかない。

『そうする』事で、わたしは、この件を引き受けた責任を果たすんだ。

と。

●正面　15センチ

「【穏やかに落ち着いて。

普段通りの口調で、別れの言葉を告げる。

これまで、本当にお世話になりました。

どうか……あの子達をよろしくお願い致します」

〈主人公〉

「……」

主人公、何も言えずに、静かにうつむく。

だがその心の中では、すでに一つの結論が出ていた。

遠くで、鳥の声が聞こえる。

主人公はそれを眼を閉じて聞き、やがて大きく息を吸うと……。

一礼して、メルヤの部屋から出ていった。

ここでフェードアウトして終了。